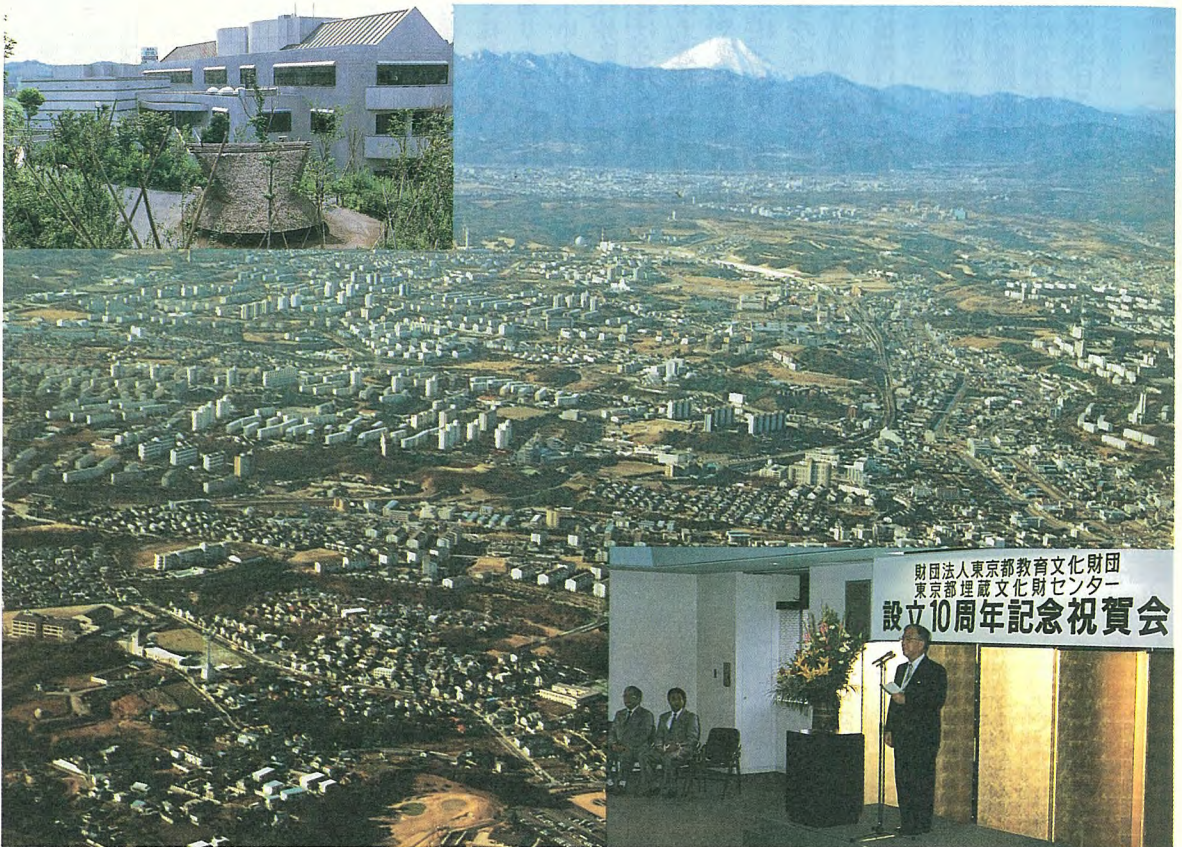


たまのよこやま

東京都埋蔵文化財センター報 No.20 平成2年9月30日

設立10周年記念号



十周年に寄せて

理事 滝口 宏



多摩丘陵は、近郊散策の地としても格好の地であり、

それにも増して、科学諸部門にとって貴重な丘としての認識も高かった。やがて、東京の都市構成上これが緊要の地として指摘され、慎重な論議を経て、此の地が開発されることになり、当面調査の主要を担ったのが埋蔵文化財である。加藤晋平・小林達雄両氏を中心に新鋭諸氏を加えてこの山野を生きる場とした先人たちの事跡を考古学の立場から究明することになった。東京の都市膨張はさらに急を告げ新組織に移ってもう十年を経た。

そして、対象地もさらに拡張され、調査開始以来膨大な量の資料が土中から学界に提供された。数十人の調査担当諸氏は土に面してその包含する資料の解明と、遺構遺物に対して学界寄与のための究明を絶えず願ってきた。

今省みて、この調査が人の過去に灯をともし、現在・未来に有効であることに誇りをもちたい。



No.947遺跡は、境川上流域の北側丘陵地帯、通称「相原・小山」地区にあり、南に開く谷とその東側及び西側斜面に立地します。

現在までに、縄文時代の陥し穴、古墳時代後期以降の粘土採掘坑、近世・近代の土坑や溝、炭焼窯などが確認されていますが、竪穴住居跡や建物跡など住まいとしての遺構は検出されていません。こうしてみると本遺構は、縄文時代よりこのかた生活の場としてより仕事の間、いわば生業の場として利用されることの多かった遺跡といえます。

今回はこの内、土器や瓦

の製作に必要な粘土を採取した粘土採掘坑をとりあげてみます。

この採掘坑は西側斜面の中腹に約70cmほどの厚みで堆積した粘土層を採取するために、斜面中腹を南北約50mにわたって掘り抜いたものです。その採取方法は、単独の竪坑を粘土層まで掘るか、または竪掘りした後横坑を掘り進め、連続的に粘土を採取していく、という二通りの方法を採用しています。いくつかがある竪坑の中には昇降用の造り付け階段の設けられた例もあります。出土遺物としては土師器の坏や甕が数個体分ほど検出されており、採掘年代を知るのに十分な資料とはいえないものの、およそ古墳時代後期以降と思われるます。

(先行調査室 宇佐美義春)

チングス・ハーン陵墓を探る 2

歴史上の人物の墓やある特定の都市を探し当てることは非常に難しい研究課題の一つです。それは「古代への情熱」で知られているシュリーマンの行った発掘を見てもよくわかります。また、日本では邪馬台国論争で有名なように、その所在に関する論争自体がこの種の問題の難しさを示して



いるようです。女王・卑弥呼の墓の所在の究明はさらに難しい作業です。墓跡が特定の人物のものであることを証明するためには、文字がなくてはなりません。石や金属に刻まれたり、紙や木に書かれたりした文字を伴う遺物などがこの種の問題を証明できるのです。いっぽう、その人物の墓やある都市の所在をさぐるためには文字、文献の他に人の間に伝わった伝承も意外に有力な資料になります。伝承を考古学的な発掘によって検証できる場合は少なくともは多く残っていますが、これらの発掘によって検証された例は多いのです。

さて、文字・文献、伝承の存在がなければ、全くこの種の問題に対して私達は研究方法を持たないということではありません。その時代に該当する遺跡や遺物の分布状態を明らかにすることは考古学のごく一般

的な研究方法ですが、この方法によってその特定すべきものの帰属した集団や国の所在を示すことができるのです。

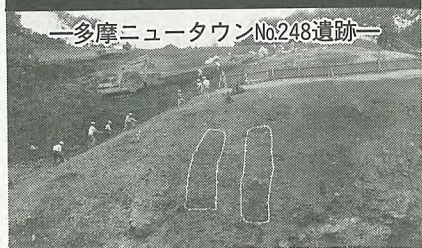
邪馬台国の位置に対する学説は弥生時代の文化的な中心を邪馬台国とみなすという見地から、主にその所在は九州説と大和説とがあります。遺物などの優位性を重視すると九州説が、そして銅鏡100枚が魏から与えられたことと魏のものとしてされている三角縁神獣鏡の配布地域の中心が畿内であることが判明されたという立場に立つと大和説を考古学的に主張できるものとされています。このような例が先に述べました研究方法に該当します。

以上のようにチングス・ハーンという特定の人物の墓、陵墓を究明するためにはいくつかが研究方法を踏まえた上でその陵墓探索のための調査の方法を採用しなければならぬのです。

(千野裕道)

遺跡だより②

多摩ニュータウンNo.248遺跡

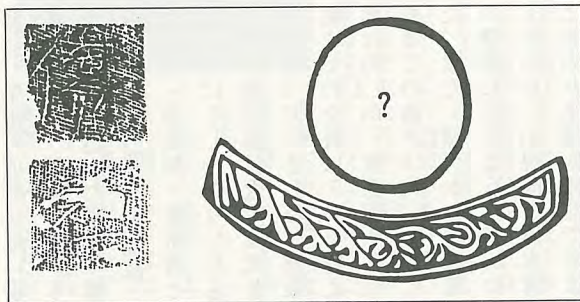


町田市小山にあるNo.248遺跡からは、縄文〜近世までの遺構・遺物が発見されています。
今回は平安時代の瓦窯と縄文時代の粘土採掘坑群について紹介します。
平安時代の瓦窯跡
窯跡は、谷筋に面した急斜面に2基並んで見つかりました。その内の1基は昭和34〜35年に調査された「セイカチクボ瓦窯跡」で、今回は30年ぶりの再調査となりました。しかしながら、2基とも瓦窯本体の崩落のため、ほんの一部しか残っており、窯の構造、規模等は不明でした。そして、

窯下の灰原（不良品や灰を捨てた場所）は水田下に深く埋もれていたため、遺存状況は良好でした。

瓦は軒平瓦・丸瓦・平瓦道具瓦があり、軒丸瓦は出土しませんでした。少数ながらへら書きの「儒・「祖」の文字瓦や、判読不可能の指書き文字もあります。また須恵器の甕・鉢等も出土しており、瓦とともに焼か

れていたと思われます。軒平瓦は文様の崩れた偏行唐草文で、よく似た物は武蔵



軒平瓦模式図・文字瓦

国分寺と神奈川県相模原市矢掛・久保遺跡で出土しているのみです。

本遺跡の北100mの位置には長谷戸瓦窯、北東500mにも瓦尾根瓦窯跡群があり、これらの瓦窯も含めた、生産、供給、年代等が今後の課題となります。

縄文時代の粘土採掘坑

採掘坑は平安時代の窯跡からさらに奥の谷頭の急斜面にかけて、広さ約2,000㎡にわたって検出され、さらに広がると思われます。No.248遺跡の周辺には、古代から近世までの粘土採掘坑が数カ所で調査されており、この地域一体はすでに縄文時代から良質の粘土産出地であったことが明らかとなりました。

穴はいずれも直径1〜2mの不整形で、丁度大人一人が中に入って作業をする広さです。また、深さは平坦面で数10cm、斜面では2〜3mもあり、すべて粘土層を掘り取っています。このような採掘坑が数多く重

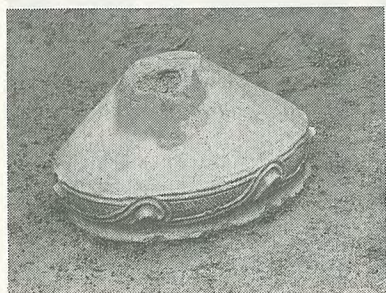
なりあって大きく二群を構成しているようですが、調査が進むと谷をとりまくような形状になるかと思われます。そして、掘り出した土砂を掻き出し、また掘りおこすという状態、そのうえ、崩落し易い地形であったためか流入する土砂がみられるなど採掘坑の単位を記録する事も難しい程です。

時期は出土した土器から縄文時代中期後半（加曽利E式）です。土器には深鉢と浅鉢があり、50個体以上、また石器は石斧（磨製・打製）、磨石等があり、焼礫、焼土、炭化物等も出土しています。

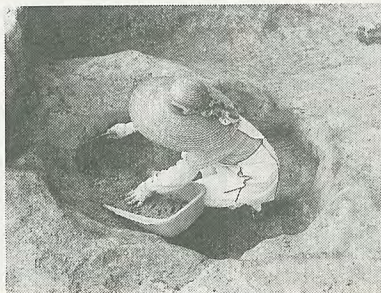
縄文時代の粘土採掘坑とそれに関連すると思われる粘土だめ遺構は、岩手県、茨城県、群馬県などで数例見つかっていますが、これだけ広範囲にわたって規模に採掘している例は現在のところ初めてです。従来縄文土器作り用の粘土について、採取方法・場所・時期など不明な点が多かった

のですが今回はその一端を知ることができました。しかも隣接するNo.243〜245遺跡では採掘坑と同時期の縄文時代の集落が調査されていることより、この集落との関連が指摘され、集落出土の土器と粘土双方の比較研究も必要となります。

（斉藤・松崎・及川）



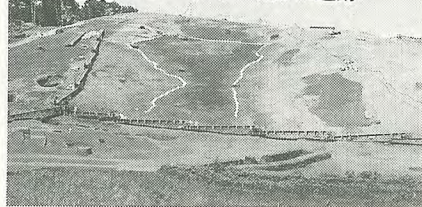
浅鉢出土状況



粘土採掘坑

遺跡だより②①

—多摩ニュータウンNo.342遺跡—



多摩ニュータウン地域及

びその周辺の丘陵地帯は、燃料となる森林資源が豊富なことや原料の粘土が容易に採集できることなどから、奈良・平安時代に窯業生産が盛んな地域でした。これら瓦や須恵器を焼いた窯跡群を、南多摩窯跡群と呼んでいます。

今回紹介するNo.342遺跡の周辺にも、瓦尾根窯跡群やセイカチクボ窯跡群（No.248遺跡）などが発掘調査されています。

この遺跡の須恵器窯は、7世紀後半の操業が考えられ、南多摩窯跡群では今のところ最も古い窯跡です。

窯は、尾根の頂部に近い場所に作られ、斜面をトンネル状に掘り込んだ窰窯の構造でした。前庭部・燃焼部・焼成部・煙道部・排水溝と構造的にもしっかりしたもので、燃焼部付近では天井部も残っていました。煙道部までの全長は7mを越え、幅は約1.3m、窯底面から天井までの高さは約1.2mでした。また、窰尻から焼成部の壁際に沿うように10cmにもみたくない小規模な排水溝と思われる溝が確認できました。焼成部や燃焼部の底面には、焼台として甕や皿などの破片が多数残っていました。また、拳大の礫や窯壁の堅い破片も発見され、これらも焼台に利用していたようです。排水溝は煙道部から西側斜面にめぐっており、底面は粘土で整地し、煙道の出口はこの排水溝の底面に出てきます。また、

焚口部の前面には、4×3.5mの長方形状に前庭部（作業をした場所）が造り出されて、そこから灰原が斜面

下方に広く広がっています。なお、焼成回数については、煙道部や前庭部の状態から少なくとも3回は火を入れたことが窺えます。

この窯跡で焼成された須恵器には、坏（無台と高台付）・碗（高台付）・皿（脚付）・鉢・こね鉢・平瓶・長頸瓶・フラスコ形瓶・甕など、器の種類にバラエティがあります。さらに、この時代では、たいへん珍しい陶硯（すずり）も焼かれています。円面硯には、硯面に低い円筒形の脚の付くもの、内部が中空で把手の付くもの、脚をもたないものの3種類があり、極めて

下方に広く広がっています。なお、焼成回数については、煙道部や前庭部の状態から少なくとも3回は火を入れたことが窺えます。

て貴重な出土例といえるでしょう。また、これらの製品は、形態や製作技法に中央工人の影響が顕著で、中には金属器を模倣したものもみられます。

多摩ニュータウン地域では、この窯と同時期の竪穴住居が調査されていますが、ここで生産した製品はほとんどみられません。

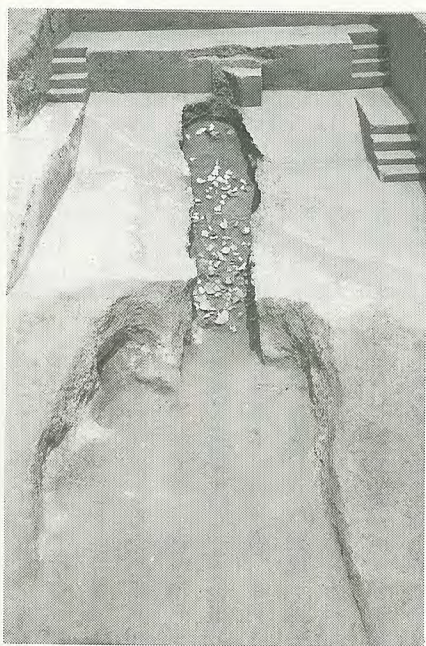
このようなことから、この窯跡は、主に中央集権的な律令国家体制が確立する過程で整備されてくる官衙（役所）・寺院関連の施設に製品を供給したものではないかと考えられ、一般の民衆には縁の薄かったもの

なのかもしれません。この窯が操業された時代は、中央において歴史的な動きが活発で、律令体制による国家づくりの息吹に満ちていた時代です。

以上のことから、都を遠く離れた東国のこの地に、当時における最高の技術水準を用いた須恵器窯が造られた歴史の意味は大きいと考えられます。

この須恵器窯からたなびく煙りは、東国における新たな時代の到来を告げる狼煙であったと、想像を広げてみたいと思います。

（鶴間正昭）



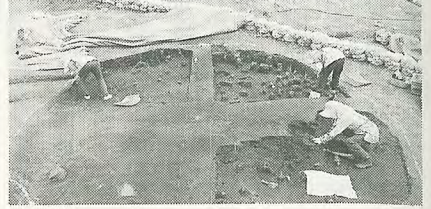
須恵器窯跡



出土した須恵器

遺跡だより②

—多摩ニュータウンNo.245遺跡—



前号では、遺跡の概要について述べましたので、今回は、注目される個々の遺構、遺物を中心に紹介したいと思います。

現在までに、縄文時代中期から後期のはじめにかけての住居跡が、50軒以上も確認されています。それらの多くは丘陵の西側の急斜面にはりつくように分布し

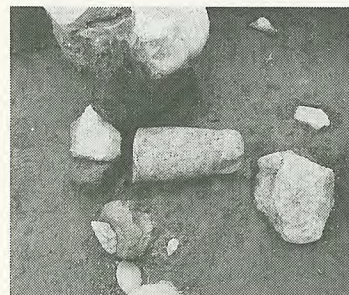


また、後期のはじめ頃に作られた配石遺構が見つかっています。配石遺構とは人頭大の

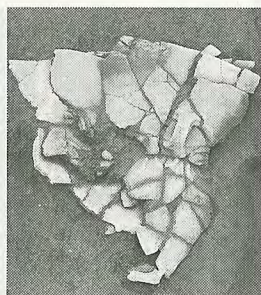
一方、中期の住居からは、



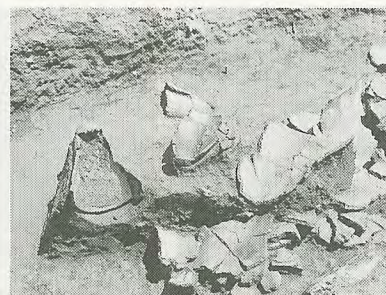
配石



石 棒



つぶれた状態の土器



たるNo.248遺跡の縄文時代の粘土探掘坑との関連も無視できなくなっています。(山本孝司)

ており、そのため竪穴住居の低い方の片壁は、ほとんどの場合残っておりません。その内の3軒、後期のはじめの住居跡は、火災に遭っていることがわかりました。これらの住居の床は、変色する程焼けていたり、完全に燃え切らずに炭になった「柱」の一部や、「屋根」を葺くのに用いたと思われるカヤのようなもの、あるいは正体不明の炭化物が真赤な焼土とともに掘り出されています。

遺物では、後期の住居から、土びんの形をした注ぎ口が付いている注口土器が発見されています。これは、液体を入れる容器と考えられています。あるいは、中味は酒だったのかもしれない。土器は形の特異性や、出土点数も少ないことより、非日常的な祭りなどの特別な行事に村人達が共用の器として使用したのでしょうか。

また、特筆すべきこととして、中期の住居跡二軒の床面から粘土のかたまり(20cm×20cm×10cm位)も出土しており、本遺跡から約400m上流での谷頭部にあ

なぜ火災に遭ったのか、

また、

遺跡だより②③

—多摩ニュータウンNo.243遺跡—



大きな特徴です。こうした特殊な条件の中で、貴重な発見が相次いでいます。

このなかでも、最も重要な発見は、縄文時代早期から前期の動物を捕らえる陥し穴と考えられている土坑のうち5基の底から、土坑を作った当時に立てられた杭の一部が朽ち果てずに検出されたことでしょう。今まで、多摩ニュータウン遺跡群の7600基を越す調査などで観察された黒い棒状の土の筋から、土坑の底には杭が立ててあったことが推測されており、この発見で、

ようやくこの推測が正しかったことが証明されました。杭の材料は、竹が多いようです。このうち、一基の土坑では、埋められた杭が坑底から突き出した状態で見つかっており、このことから判断すると、他の土坑の杭も同様に突き出していたと推測されます。

この谷には、縄文時代以前から川が流れ続けており、様々な時代の川床が埋まっており、発掘によって流路の移り変わりが判りました。この川床や岸周辺からは、さらに現代に至るまでの遺構・遺物が出土しています。また川の中に積もった土は、空気を通しにくく、また含まれる水分が多いので、台地上の遺跡では残りにくい木の道具・植物・昆虫の遗体などが出土しているのも

その各々に十本前後の杭を束の様に埋めたものと、数本の杭を底に直接差し込んだものがありました。また、

本遺跡の土坑の多くは、当時の川岸に沿って掘られており、これらの土坑が陥し穴であるとすれば、川辺に集まる動物を狙ったものと考えることができます。

これによって、土坑の使用われ方がより具体的に復原できるようになり、今後の研究に大きな手がかりを提供することになるでしょう。

この他にも本遺跡は、縄文時代中期～後期には、川岸に集石（石を集めて焚火

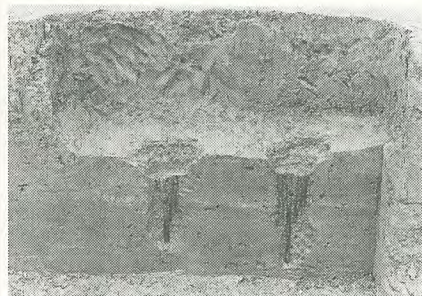
をした跡）が作られ、西隣

のNo.341遺跡にあるムラの水場として利用されていた。

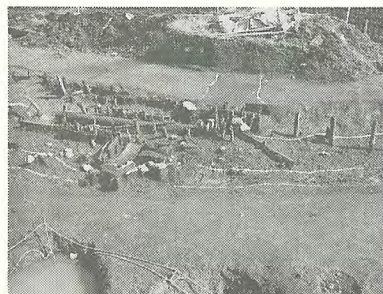
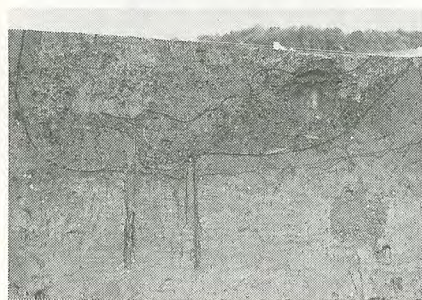
また、古墳時代後期～平安時代には、川岸から西斜面にかけてムラが作られ、川は水場・ゴミ捨て場・木器の水漬け場などとして利用されたこと、江戸時代には、水田に水を引く用水としても利用されていたことが判りました。

人と川から、本遺跡は、多摩ニュータウンの遺跡群を考える上での新しい視点を与えてくれます。

(田中・武笠・長佐古)



縄文土坑と杭



近世の杭列



奈良時代の木皿



縄文時代の集石

文化財講座 <16>

縄文時代と人々 (4)

縄文時代の災害
現在、熱帯雨林の伐採やフロンガスの増加によるオゾン層の破壊など、地球的規模で進行する環境破壊が問題になっていきます。

古代文明都市、モヘンジョ・ダロは都市の発達と人口集中によって、周辺の環境を破壊したために滅んだとも言われ、今日に通じる重要な問題を提起しています。

さて、四季の移り変わりによって生みだされる産物に沿って生活した縄文時代は、初めのうちは動植物を求めてごく小人数で移動を行ない、やがて中頃になると人口も増え、ムラを作ろうになります。それまでの移動生活から一定の期間その場で生活するようになったのです。その

ため生活に必要な木材・あるいは炊事や暖房、時には土器を焼くために、膨大な量の燃料が必要となりました。考古学者のなかには、ムラが放棄される第一の理由が食料の枯渇ではなく、燃料となる木々を切り尽くしたためだと説明する人もいます。その結果「実」のなる木は残し、それ以外の雑木を燃料としたため、ムラ周囲には栗林などが整然と広がっていたのではないかと想像できるのです。

さてNo.475遺跡から、今まで想定にすぎなかったムラ周辺の環境が具体的に分かるものが発見されました。自然の木が50本ほど倒れた状態で出土したのです。この遺跡のすぐ隣には、縄文時代中期の集落が発見されたNo.471遺跡があり、この自然林が、ほぼ同時代に生えていた可能性が高いのです。

このNo.471遺跡では総数50軒の住居跡が発見されていますが、その時期は中期初頭〜中葉に限られ、その後

に継続する時期の住居は発見されておりません。この状況を見ると、集落周辺の地崩れとそれにもなつて発生した環境の変化がこの集落の終えんと関係するのかも知れません。

この他にも実や虫などが多数発見され、これらの種類を分析することによって、林が原生林なのか、人手が加わったものなのかわかるのです。縄文時代のムラの人々が周辺の自然をどのように活用していたのか、具体的にわかる日も近いと思います。



(中西 充)

姿をあらわした倒木

展示解説会について

広く来館者の方々に祖先の生活ぶりや、文化財の重要性について理解していただくことを目的とし、8月18日に常設展示の解説会を開きました。

これは、当センター調査研究員の企画によるもので、初めての試みでもありましたが、197人の参加者があり、アンケートの回収率は、72%と高く盛況の内に終わりました。

このうち、当センターの普及活動に初めて参加された方が36%を占め、また常設展示場に初めて来られた方が54%であったことは、関係者を喜ばせました。

解説員は10〜15名の参加者に1名ずつ付き、展示全体の概要・意図の説明と器の変遷を通じた歴史の流れを解説する通史コーナー、縄文中期の村へのタイムトラベルを目指した「5000年前の風景」コーナー、発掘現場からのニュースの第一便

である速報展示コーナー、小テラマ展示コーナーのエントランスホール等、屋内常設展示解説と、さらに遺跡庭園の縄文中期復元住居内では、縄文クッキーの製作・実演に賞味会も加わって立体的な催しとなりました。

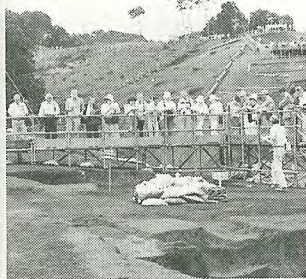
また、参加者の方々から活発な質問が寄せられる光景も各コーナーで見られ、展示方法の「効果と反省」を肌で感じる一日でした。

そして87%の方が展示解説会・解説員の必要性を考慮しておられることも励みとし、より能動的な展示を目指し、今後と同様な解説会を実施して行きたいと思っています。(江里口省三)



遺跡見学会

当埋文センターでは発掘作業の進捗を見ながら、毎年現場の一般公開を行ない、調査研究の成果を公表しております。今年度は7月16日(土)に町田市小山地区の遺跡群(No.342・No.243・No.244・No.245)で実施しました。見学コースは古代の須惠窯↓古代の川床↓縄文集落の順でした。



当日は午前中豪雨にみまわれ開催が心配されましたが、午後には快晴となり、参加者は70名を越えました。参加者は小学生から子供づれの親子も目立ち、遠くは山梨、埼玉方面から参加された熱心な方もありました。

文化財講演会

九月一日、当センター職員千野裕道による講演は「モングルの自然と文化」―チンギスハーン陵墓の調査に参加して―と題して行なわれ、センター会議室に110名の参加者がありました。

安全衛生だより

○安全の日

七月一日からの全国安全週間にあわせ当センター事務所・鹿島整理所・各発掘現場で「安全の日」の行事を行ない、「安全標語」の入選作品の発表が行なわれた。安全標語は応募者360名・549句の中から6句が選ばれた。一等「石膏入れ 気持引き締め 心せよ 手に持つ道具は 肥後守」西田千恵子

二等「見直そう 慣れた作業と 気のゆるみ 一声かけて 安全作業」小林明子
同 「土坑は動物たちの陥し穴 安全は慣れた作業が 落とし穴」可児通宏
三等「フラツときたら ひ

とやすみ 無理は禁物 真夏の発掘」篠田紀子

同 「災害に 時なし 場所なし 予告なし」柳沼邦三郎

同 「近道と思って通る道よりは 安全意識で渡り棧橋」柴田信明

○救急法講習会

8月4日(土)に多摩消防署救急隊員を講師として実施し、職員ほか31名の参加があった。その内容は、1出血の種類、2止血法、3骨折の手当、4熱射病の順で進められた。「講習を受けてなるほど」、「実習して戸惑いがち」、「自分では知っていたはず」等の発言がしきりであった。繰り返し行う訓練の重要性を実感した。(日高晴義)



トピックス

平成二年度の職員研究助成・海外研修が6月に次のとおり決定しました。

○職員研究助成 「多摩丘陵における先史時代の石材利用」新井真博・川島雅人・原川雄二

「中世瀬戸・美濃窯製品の流通に関する研究」内野正流
「縄文時代前期中葉における逆刺付刺突具の出現の背景について―南関東を中心に―」山口慶一

○海外研修 比田井民子、斉藤進、佐藤宏之

人のうごき

▼7月19日付で、伊藤陽介常務理事は福祉局次長に転出され、9月25日付で、高田健三常務理事が就任しました。

センター催物案内

○縄文土器作り教室(30名)
第一日 10月20日 9:30〜講義
第二日 10月21日 9:30〜製作
第三日 11月10日 10:00〜焼成

申し込みは往復葉書に住所・氏名・年齢を明記の上、センター調査研究部宛、材料費^{¥500}、切10月9日(必着)

○文化財講座(120名・1:30〜)
第一回 9月29日「多摩ニユータウンNo.107遺跡の木器」竹花宏之

第二回 10月6日「アジア・ヨーロッパの木工ロクロ技術」中川重年

第三回 11月17日「木地屋の系譜」橋本鉄男
会場はセンター会議室

あとがき

センター設立10年で「たまのよこやま」は成人式を迎えた。調査は本20号でみるように相原小山地区に集中し、いよいよ第四コーナーを回り、広域調査の総決算が急がれる今日この頃である。(たての)



発行

財東京都教育文化財団
東京都埋蔵文化財センター
〒206 東京都多摩市落合
1-14-2
☎ 0423-73-5296
0423-74-8044
平成2年9月30日